オナガドリの特徴

○尾部の基本的な１０対（２０本）は、尾が抜け替わらずに伸び続けます。

○鶏は一般的に日長時間の関係から、換羽を促すホルモンが分泌され、換羽を冬に向かって行いますが、尾長鶏の場合は遺伝的に換羽しません。

（鶏冠　Comb）

鶏の冠には単、クルミ、バラなどの種類がありますが、尾長鶏の場合は単冠です。その凹凸も５～７個が一般的です。

（嘴　Beak）

鶏の嘴(くちばし)は、水鳥や肉食性の猛禽と比較して穀類を食べるのに都合が良いようにできています。そのため、尾長鳥は米、小麦などで飼育できます。

（眼　Eye））

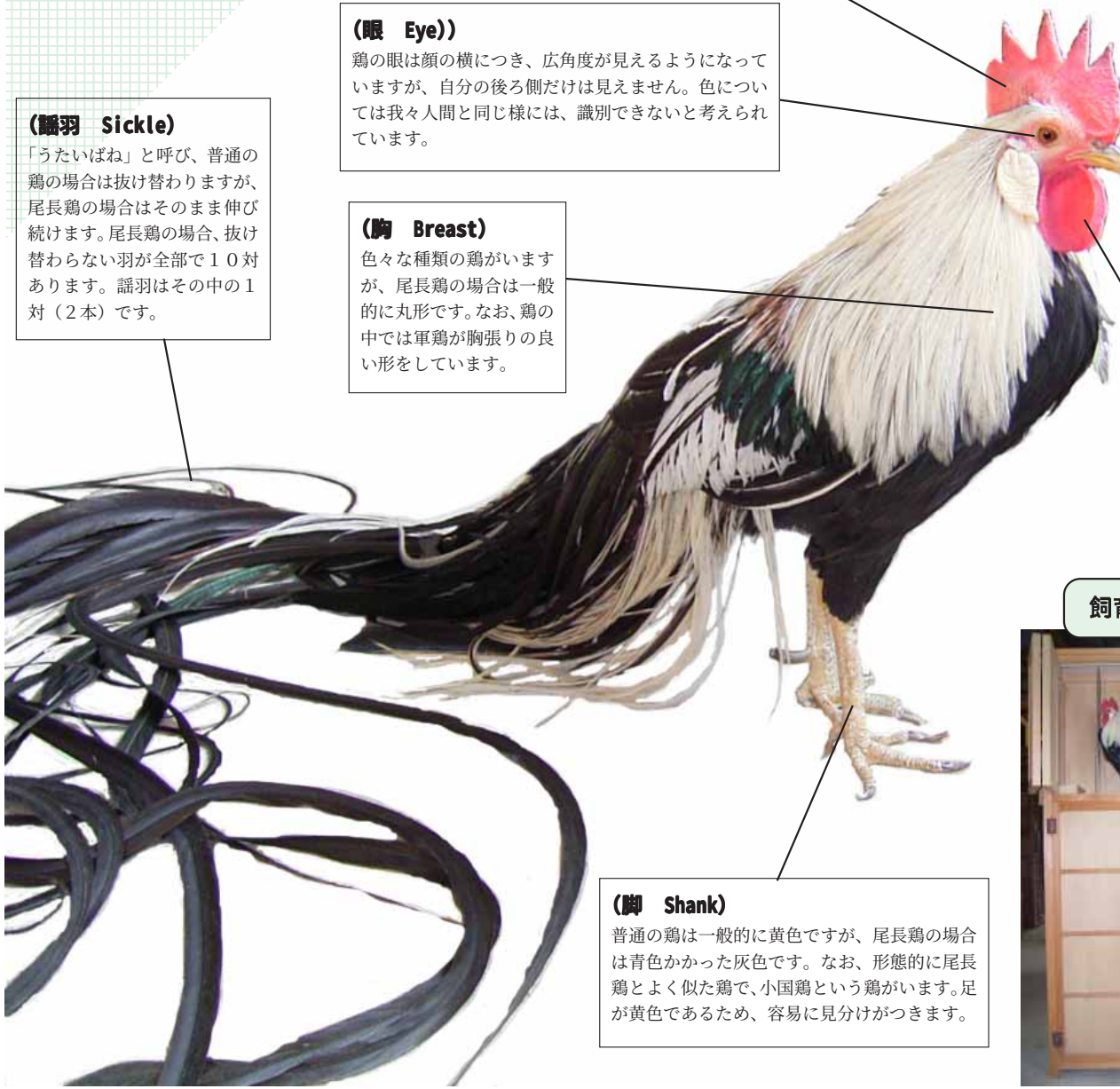
鶏の眼は顔の横につき、広角度が見えるようになっていますが、自分の後ろ側だけは見えません。色については我々人間と同じ様には、識別できないと考えられています。

（謡羽　Sickle）

「うたいばね」と呼び、普通の鶏の場合は抜け替わりますが、尾長鶏の場合はそのまま伸び続けます。尾長鶏の場合、抜け替わらない羽が全部で１０対あります。謡羽はその中の１対（２本）です。

（胸　Breast）

色々な種類の鶏がいますが、尾長鶏の場合は一般的に丸形です。なお、鶏の中では軍鶏が胸張りの良い形をしています。



（肉垂　Wattles）

鶏には肉垂(にくすい)、耳朶(じだ)がありますが、何のためにあるのかは不明です。一種の飾りであると考えられます。

（脚　Shank）

普通の鶏は一般的に黄色ですが、尾長鶏の場合は青色かかった灰色です。なお、形態的に尾長鶏とよく似た鶏で、小国鶏という鶏がいます。足が黄色であるため、容易に見分けがつきます。

飼育箱の構造

どのような方法で、飼育を行っているの？

基本的に一般の鶏の飼育方法と同じです。しかし、尾を長く伸ばす雄鶏については、長くはえそろった尾に仕上げるため、生後約1年たった頃に尾の羽毛を抜き取る場合もあます。その後、30～40㎝程度に再度伸びた時点で、飼育箱に入れます。

飼育箱とは、どのような構造なの？

飼育箱は、高さ約180㎝、幅約18㎝、奥行き約82㎝の板張りの箱です。内部の前方から約24㎝、上部から約60㎝の位置に、止まり木が設置されています。前方上部は格子戸になっており、その下には、引き出し状の餌箱と水入れが設けられています。また、片方の側面は開閉出来る構造で、尾長鶏の出し入れや、下部にある糞受けの取り出しが、容易にできる構造になっています。なお、糞の落下部には仕切りがあり、長く伸びた尾が糞で汚れないように、工夫がされています。

どのような餌を食べているの？

尾を長く伸ばさない雌鶏の餌については、一般の鶏と同じように完全配合飼料(市販のもの)を主に使用しています。一方、雄鶏については昔からの習慣で、玄米や小麦といった粒状の餌を主食として与え、副食として少量の青菜と動物質の飼料を給与しています。また運動時には、砂やカルシウムといった無機物も与えています。

日頃どのような管理が行われているの？

鶏にストレスを与えないようにするため、飼育箱は夏涼しく、冬温かい静かな場所に置き管理しています。飼育箱で生活する雄鶏は1週間に2回程度、尾が地面につかないように注意を払って、10分間程度運動を行います。また、飼育箱の中は常に清潔に保つように心掛け、尾には殺虫剤を散布して、害虫の駆除や予防に務めています。なお、尾がもつれないように最善の注意を払って飼育し、尾に糞が着いた時には、石鹸でよく洗い落としてから乾燥します。

大篠長尾鶏保存会

明治４１年に大篠村長尾鶏保存会（大篠村は現在の高知県南国市大埇・篠原・明見が範囲）が設立され、村や郡の補助金により保護・繁殖が始まりました。その後、大正１２年３月に天然記念物の指定を受け、国庫補助金で管理を行うようになりました。しかし戦争が始まり、羽数は急激に減少し（９羽）、尾長鶏は絶滅の危機に至りました。そこで、昭和２４年３月に保存会を再建して増殖と改良に努め、現在では観賞用に維持・増殖が行われています。